

## [エッセイ] 私たちのドイツ留学体験記

その他のタイトル	[Essays] Unsere Erlebnisse in Deutschland
著者	田中 愛, 李 彩花, 後迫 一貴
雑誌名	独逸文學
巻	57
ページ	139-144
発行年	2013-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017996">http://hdl.handle.net/10112/00017996</a>

[エッセイ]

## 私たちのドイツ留学体験記

田中 愛：オーガニック農家で農場体験

9月に初めてドイツへ降り立ったときは、初めてのヨーロッパで、言語も環境も全てが異なることに新鮮さを感じ、ドキドキと胸が高まりました。しかしその反面、これから始まる新生活に、私自身の語学能力の低さから不安を感じ、動揺を隠せませんでした。実際に生活してみると、売店ででの対面販売ですらドイツ語ができず、英語で話しかけられるなどといった、もどかしい思いをすることばかりでした。語学コースでもドイツ語で授業を理解することの難しさに、苦しんでいたことが懐かしいです。語学コースが終わり、疲れ切った後で、寮のキッチンに出ていく元気がなく、食事をリングで済ましてしまう時期もありました。留学初期は自分の不甲斐なさに落ち込み、まだまだ始まったばかりの人生ですが、初めて大きな挫折を味わったように思います。「今自分は底辺にいて、上を目指して頑張ればいい。これからできることを自分なりにこなしていこう。できなかったことではなく、できたことを数えていこう」と考えられるようになってきたころから、友達も増え、留學生活に光が差してきました。

この一年間で、語学面はもちろんですが、精神的にも成長できたことが私にとっての財産です。初めての一人暮らしで、親のありがたさを身に染みて感じましたし、国籍の違う友達と友情を築くことで、考え方の違いに驚きながらも異文化交流を図ることができました。そして、今までは世界史の教科書、紙面や講義で学んではいたものの、どこか非現実的にとらえてしまっていた歴史や現在の社会情勢を友人の口から直接聞くことで、身近に感じ、初めて現実問題として強く再認識しました。ニュースを見ていても、留学前とは違い、友達のいる国の現状はどうなの

か、問題はないのだろうか、など熱心に耳を傾けるようになり、見方が変わりました。現地へ住み、勉学に励むことで、旅をするだけでは、気付くことのできない本来のドイツの姿や、学生があるべき姿を垣間見ることができたように思います。

しかし、ドイツ語を学びたい、国籍の異なる友達を作りたいというだけなら、日本でもできることです。それではドイツへ来た意味はそれほどないように思い、現地にいたときは、ドイツでしかできないことをしようと心がけていました。その結果、様々な食文化を知りたいとスーパーマーケットによく足を運んでいるうちに、税金や無農薬野菜、地産地消に興味を持ち始めました。そして、一人でご飯を食べるのではなく、友達やスピーキングパートナーと食事を取るようになっていく中で、ベジタリアンに関心を抱き始めました。帰国する二週間前には、ゲッティンゲンで学んだことを生かす最終仕上げとして、オーガニック農家へ行き、5日間の農場体験をしました。そこはリンゴ畑と養蜂場がメインの農家で、草取りなどといった地道な作業から、リンゴジュースを搾る力仕事やハチの巣を掃除する危険な作業を共に行い、生産者の一員となりました。このような地道な作業をコツコツと行うことで、収穫を迎えるまでの大変さや有機農家ならではの苦労を身を持って学びました。また、衣食住をともにすることで、食に対する意識が変わり、食事をする際には必ず感謝の気持ちを持つようになりました。別れの際には「あなたはもう家族の一員よ。いつでも帰っておいで」とハグをしてもらったことは、忘れることができません。肉体や精神的にも辛い時はありましたが、自主的に作業を手伝い、コミュニケーションを大事にすることで、良い信頼関係を築くことができ、最高の経験を積むことができたのではないかと自負しております。

この一年間で感じたこと、学んだことは数知れません。この貴重な経験をこれからどのように活かしていくのが重要です。まずは目に見える形で結果を残すためにドイツ語能力検定を受け、さらに現地で疑問に感じたことを講義やゼミで研究し、卒業論文に繋げていきます。この一年は、自分ひとりだけの力でやってきたものではなく、国際部や専修の先生方、両親など、多くの方々に支えてもらいました。友人とは、お互いに助け合い、高めあうという意味を学んだ一年であったようにも思い

ます。この素晴らしい環境を当たり前のことだとは思わず、常に感謝の気持ちをお忘れずに、次のステップに進んでいきたいです。

## 李 彩花：魔女の山ブロッケン山へ

私は、2010年9月からの1年間、ドイツのゲッティンゲン大学で留学生活を送りました。憧れのドイツでの初めての1か月は各種手続きのため拙いドイツ語で必死に駆け回り、あっという間に過ぎていきました。銀行や役所などでの手続きの際に私のドイツ語で通じるだろうか、話を理解できるだろうか、という不安もありましたが、担当の方々が親切に対応してくださったおかげで、留学生活に抱いていた不安も消し飛んでしまいました。

ドイツでの生活が3か月ほど過ぎた頃、ルームメイトたちとの生活習慣の違いによるずれが表面化してきました。今までは、6人がそれぞれ自分のペースで生活していたのですが、それではいけないと定期的に話し合いの場を設けることにしました。そうすることで、お互い今まで遠慮していて言えなかったことなども、正直に話すようになりました。話し合いを通して、私が今まで常識だと思っていたことが、必ずしも全員にとっての常識ではないということがわかりました。1年間の6人での共同生活を通して、自分とは違う価値観を素直に受け入れることができるようになったと思います。

また、ドイツ語の語彙や会話力の無さに悩み、友人との会話を憂鬱に感じるようになってしまった時期もありました。そんな時、友人の一人に、「会話中に自信が無くなるとすぐに辞書に頼ろうとする。せっかくドイツに来ているのだから、もっとドイツ語での会話を楽しもう」と、言われました。確かにその頃の私は、自分の意思を上手に伝えられないもどかしさや、単語や文法を間違いたくないと思うあまり、会話中もしばしば辞書を見て確認していました。しかし、これは楽な方法に逃げているのだということに気がつき、改めてドイツ語と真剣に向き合うようになりました。以来、わからない言葉があっても、わかる言葉で、自分の言葉で話すようになり、拙いながらも友人との会話が以前よりも楽し

いものになりました。また、ドイツ語が伸び悩んでいることを相談すると、小説を読んでみたらどうかと、私の好きな小説をプレゼントされました。小説を読みだしてみると、読むスピードやわかる範囲が徐々に増えていくことで、確かに少しずつでも成長しているのだということが実感できました。少しでもドイツ語の成長を感じると、ただ難しく大変だと感じていた講義も意欲的に参加できるようになりました。思い返すと、私が1年間何事もなく留学生活をおくれたのは、このような友人たちの助けのおかげだと思います。

ドイツ語での会話が楽しくなると、もっと多くの経験をしてみたいと思うようになりました。まず、友人たちとお菓子作りや料理の練習をしました。料理は食べる以外はあまりしたことがなかったのですが、ドイツ語のレシピと覚束ない包丁さばきで悪戦苦闘しながらも、少しずつ覚えていきました。

休日は機会があるたびに演奏会や美術館に通いました。ドイツでは日本よりも演奏会などに気軽に頻繁に通うことができ、素晴らしい演奏を聴く機会をたくさん得ることができました。また、美術はあまり詳しくはなかったのですが、美術館に何度か通ううちに、自分の好きな画家や絵のジャンルができました。

長期休みには、いろいろな場所に旅行にも行きました。とくに、ドイツの魔女について興味をもっていた私が、必ず行ってみたいと願っていた、年に一度魔女たちが集まるといわれるブロッケン山を訪れたときの興奮は忘れられません。ヴェルニゲローデから蒸気機関車に乗り、ブロッケン山の山頂に着いた時は、一面に霧がたちこめ、雨も降っていました。しかし、そんなことは気にもせず、魔女たちの集会に思いをはせながら「魔女の祭壇」目指し歩いて行くと、ふっと雨がやみ晴れ間が出てきました。魔女たちが歓迎してくれたのかなと感じた、あの瞬間の興奮や感動は、とても言葉では表せません。

私が留学生活で得たものは、心のゆとりだと思います。初めての自炊や共同生活で、多様な価値観に触れ自分を見つめなおすことができ、私を支えてくれる人たちの存在やありがたさに気がつきました。さまざまな場面で好奇心を刺激され、自分自身の世界が格段に広がりました。また、悩んだこともあったけれど、ドイツやドイツ語が好きだということ

も再確認できました。この1年間は私にとって、心の糧となる本当に貴重な1年でした。

## 後迫 一貴：ドイツは第二の故郷

私は、2011年9月から翌2012年9月まで、ドイツのゲッティンゲン大学へ留学させて頂きました。私はもう随分と前から、いつか海外へ、特にヨーロッパへ留学をしたいという夢があったので、今回の1年間の留学は私にとっては夢の実現でもあり、留学が決まった時は、本当に感慨深いものであったことを覚えています。留学するためには、たくさんの書類等を提出したりしなければならず、またその中にはゲッティンゲン大学から送られてくるドイツ語の書類もあり、当然ドイツ語で書かなければならず、たくさんの苦勞もりましたが、周りの支えもあり、無事不備もなく留学生生活をスタートさせることが出来ました。今回の留学は、私にとっては初めての海外でもあったので、目に映るもの全てが真新しく、ひっきりなしに感動していました。国が違えば文化も違う。日本とは全く異なる世界で、私は人生を新たにスタートさせるかのような気持ちになりました。また今までと決定的に違うところは、今までなら家族と一緒に暮らしていたので、私は何ひとつ不自由のない暮らしをしていましたが、ゲッティンゲンには当然家族がいないので、全てのことを1人でしなければならぬことです。果たして本当に出来るのかという心配と同時に、親の偉大さも痛感しました。しかし自分で決めた留学生活なので、当然その覚悟はできていたし、泣き言は言わないと決めました。幸いホームシックにもかかりませんでした。それはこの留学が私にとっては夢であったし、実際留学生活が予想どおり素晴らしいものであり、毎日が本当に充実していたからで、自然と寂しいといった気持ちは湧いてきませんでした。

留学において一番問題となるのが言語の問題です。ゲッティンゲンでは当然誰も日本語を話さないで、現地の言葉、あるいは英語で話さなければなりません。ドイツ人は多くの方が英語を話せるので、英語が出来れば確かに生活は出来ますが、私はドイツ語も英語もほとんど話す

ことが出来なかったので、コミュニケーションを取るのにとっても苦労しました。しかし皆それでも呆れずに、寛容な精神でそんな自分を受け入れてくれたことが、私にとって非常に大きな支えとなりました。語学コースや留学生歓迎会を通じて、多くの友達が出来ました。ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ等ゲッティンゲンには世界中から留学生が来るので、非常にグローバルな交友を持つことが出来、日本では体験できない楽しさがありました。多くの素晴らしい友人に恵まれ、どこかへ遊びに行ったり、たくさんの思い出を共有したり、勉強面でも1か月毎に自分の語学力が向上しているのがはっきりとわかりました。大変なことやトラブルもやはりありましたが、楽しさの方が遥かに上回っていたので、どんな困難も乗り越えることが出来ました。2011年の半年間は語学の基礎を積み、私の語学面における基盤となるものを作り上げました。これがその後の留学生活でもあらゆる場所で生きてきます。それがなければ私の留学生活はもしかしたら全く別のものになっていたかもしれません。2012年になってからは特に時間が経つのが早かったのを覚えています。時の流れの早さに驚きを隠せません。もう基礎は出来上がっていたので、生活面でのコミュニケーションは全く困らないぐらいになりましたが、それでもドイツ人達との会話ではわからないことが多々あり、ドイツ語習得の道のりは果てしないと思いました。

ドイツでの思い出は語り尽くせないほどありますが、私にとって今回の留学で出来た友達は一番の宝です。その友人達とは今でも連絡を取っているし、当時ホームシックにはかかりませんでした。逆に日本に帰ってきてから、時々ドイツへのノスタルジーを感じます。近い将来必ずドイツへ、ヨーロッパへ戻るつもりです。今回の留学生活で私にとっての第二の故郷が出来ました。国、人々、すべてが温かく居心地が良かったです。またドイツから帰国して日本の素晴らしさも再認識しました。私は自分が日本人であることを誇りに思います。私は全ての人に留学を勧めたいです、何故ならこれほど素晴らしい機会を経験しないのは勿体ないと思うからです。自分の世界が広がると思います。私を人間として一回りも二回りも成長させてくれた最高の留学生活でした。